# 30［短歌］　『詩的レトリック入門』

　短歌の〈語り手〉も、定型短詩という共通性によって、俳句と同じように考えられることが多い。しかし、俳句が和歌の五七五七七音の、下句十四音を切り捨てた発句として、まず成立したという本質が、そこに①微妙な差異をつくりだしているはずである。それは俳句の〈語り手〉は、〈作者〉という〈私〉の主観や感慨や詠嘆を、を中心とする②助詞の使い方で暗示したり、想像させたり、あるいはオブジェやメタファーとして客体化してみせることはあっても、直接の表白としては語らないところに見られる。しかし、短歌において、〈私〉の主観は直接表白される。

　(a)　人もなきしき家は［　　Ａ　　］旅にまさりて苦しかりけり

　(b)　東海の小島のの白砂に

　　　　　われ泣きぬれて

　　　　　とたはむる　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　石川

　むろん、苦しいと言っているのも、われ泣きぬれてと言っている〈われ〉も〈作者〉であろう。こういう〈作者〉の直接の感情の表白は、ここでは下句の七七音が可能にしているわけだから、下句を切り捨てた俳句が、いわば言外の余白にそれを語らせても、ことばの表現の内部から〈私〉を消してしまうことになったのは当然であろう。

　しかし、〈　Ｂ　〉が〈　Ｃ　〉を押しのけて〈　Ｄ　〉の表白をするのが、短歌形式の特色だと言うわけではない。むしろ、〈語り手〉が、〈作者〉の自己表白や感情のドラマを演出したがっているのが、短歌だといった方がいいだろう。先の旅人の歌における〈語り手〉は、〈作者〉が妻のいない空しい家に帰ってきて、旅以上にみたされぬ思いをいだいて苦しんでいる、その姿がありありとえるように演出している。あるいは啄木の歌では、〈語り手〉は、砂浜で泣きれて蟹とたわむれている〈作者〉の姿を演出している。演出ということばが悪ければ、③そのような意味やイメージとして、作者の姿を語っている、と言ってもよい。だいたい悲嘆に暮れていては歌も作れないし、蟹とたわむれていては文字を書くこともできないだろう。

●語注

大伴旅人＝万葉の歌人。の父。

問１　空欄Ａには旅にかかる枕詞が入る。その枕詞を漢字二字で答えよ。4点

〔　　　　　〕

問２　空欄Ｂ〜Ｄに入る最も適当な語句を次からそれぞれ選べ。2点×3

ア　語り手　　イ　私　　ウ　作者

Ｂ〔　　　〕　Ｃ〔　　　〕　Ｄ〔　　　〕

問３　(b)が収められている啄木の第一歌集名を答えよ。4点

〔　　　　　　　　　〕

問４　(b)の歌について。

（１）この歌を「起承転結」の四部構造で考えた場合、「転」にあたるのは何句目か答えよ。3点

〔　　　　　〕

（２）（１）の「転」では、どういうものからどういうものへの変化を表しているのか。内容上から読み取れるものを二つ答えよ。3点×2

▽〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

▽〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

（３）　この歌と次の歌とは、「の」を多用することである種のリズムを生み出している。これ以外に「の」はどのような効果をもたらしているか説明せよ。4点

ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲　　　佐佐木信綱

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問５　傍線部①の「差異」とはどのようなものか。次の空欄に合うように答えよ。3点×2

俳句は（　ア　）が、短歌は（　イ　）。

ア〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

イ〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問６　傍線部②について、以下の二つの句は助詞の違いによって、どのような意味の相違が起きるか説明せよ。7点

ア　米洗う前に螢の二つ三つ

イ　米洗う前を螢の二つ三つ

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問７　傍線部③は具体的にはどのような作者の姿なのか。本文中の語句を用いて三〇字程度で答えよ。10点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

【解答】

問１　草枕

問２　Ｂ＝ウ　Ｃ＝ア　Ｄ＝イ

問３　一握の砂

問４（１）四句目

　　（２）▽自然から「われ」という人間への変化。

　　　　　▽雄大なものから一人の人間というちっぽけなものへの変化。

　　（３）大きなものから次第に小さなものへと焦点を絞っていく（ズーム・アップの）効果。

問５　ア＝〈私〉の主観を直接表白しない

　　　イ＝〈私〉の主観を直接表白する

問６　アでは蛍は静止している（もしくはほとんど動いていない）が、イでは話者の前を蛍が飛んでいく（、あるいは行ったり来たりするイメージとなる）。

問７　悲嘆に暮れている作者、砂浜で泣き濡れて蟹とたわむれている作者。（31字）

■覚えておきたい語句

□4　暗示……………………明確には示さずそれとなく気づかせること。

□4　メタファー……………隠喩。

□5　客体……………………人間の意思や行為を受ける対象。客観。〔反〕主体

□5　表白……………………考えや気持ちを言葉に表すこと。

□6　主観……………………その人ひとりのものの見方。主体。〔反〕客観

□13　言外……………………言葉に表されていないところ。

〔要　約〕

　［1］段落の内容を、［2］段落で具体例をあげて、［3］段落で言葉をかえて説明している。よって、［1］段落の内容を中心にまとめる。

　　　　↓

短歌と俳句の〈語り手〉には、微妙な差異がある。俳句の〈語り手〉が、〈私〉の主観や感慨を、直接の表白として語らないのに対して、短歌は〈語り手〉が〈作者〉の感情の自己表白を演出している。（91字）

〈筆者＆出典〉北川　透（きたがわ・とおる）一九三五年（昭和10）愛知県生まれ。詩人・文芸評論家。北村への関心が高く、『〈幻境〉への旅』『内部生命の』『の行方』という三冊の北村透谷論を著している。本文は、『詩的レトリック入門』（思潮社、一九九三年）より。詩のレトリック（修辞法）について、短歌・俳句まで視野に入れて述べたもの。第四章「詩作品の〈語り手〉とは」の一節。

【読みのセオリー】

★短歌・俳句の構造を考える

　問４のように、短歌俳句を起承転結の構造で考えるとき、「転」はどこかを考えていくのが有効である。「転」とはその歌（句）中の最大の変化である。

　変化を考えるときのポイントは二つある。

①　形式（表記）上の変化

②　内容上での変化

　そして、それらの変化がどんな意味を持つかを考えていくと、短歌俳句は深く読めてくる。

■読みのセオリー［実践］短歌・俳句の構造を考える

問４　（ｂ）の歌を「起承転結」で考えよう。

①　形式上の変化

句切れは［１　　　］。

ただし、三行の［２　　　　　　］になっていることから、「転」は［３　　　］句目と考える。

②　内容上の変化

［４　　　］や［５　　　］といった自然から［６　　　］という人間への変化が読み取れる。

〔解答〕　１なし　２分かち書き　３四　４東海　５小島　６われ

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊差し替え

問２　空欄Ｂ〜Ｄに入る最も適当な語を次からそれぞれ選べ。（空欄Ｂ、Ｃ、Ｄを次の位置に変える）

Ｂは、現行の〈　Ｄ　〉、Ｃは、19行目の〈　語り手　〉、Ｄは、19行目の〈　作者　〉

ア　語り手　　イ　私　　ウ　作者

　［答］　Ｂイ　Ｃア　Ｄウ

＊差し替え

問３　空欄甲に入る歌の作者名を漢字で答え、その歌が収められている歌集名を答えよ。（甲「石川啄木」を空欄に）

　［答］　作者名＝石川啄木　　歌集名＝一握の砂